

●二人で味わう古典和歌(68)

伏見過ぎぬ岡の屋になほ止まらじ日野までゆきて駒こころみん

西行

西行といえば、桜と月を愛した旅の歌僧のイメージが強いけれど、これはまだ僧になる前の一首。出家以前の若き日、鳥羽院を警護する役職であった北面の武士時代の一場面が詠われためずらしい歌である。

「人が伏すという伏見を過ぎ、船が泊まるという岡の屋にもまだ止まるまい。暗くならないうちに、日野まで足をのばして、この駿馬の能力を試してみよう」。

馬上から大きく景観を捉える初句六音の力みなぎるリズムから、結句まで一気に駆け抜けてゆく韻律の疾走感。前から後ろへぐんぐん過ぎてゆくスピードを楽しみながら、活力にあふれたひとりの若者の姿が見えてくる。「駒こころみん」には馬を操る心の高ぶりが、傾いてゆく陽と逆行するように張り満ちて感じられる。

西行はすぐれた歌詠みであるだけでなく、弓や蹴鞠、馬

術にも秀でていた。鎌倉時代の記録書『吾妻鏡』には鶴岡八幡宮で源頼朝と対面した西行が、歌や弓、馬のことなどについて訊かれて語るうちに夜が明けてしまったという逸話がある。そして頼朝から謝礼にとせっかくもらった銀の猫を、門前近くで遊んでいた子どもたちにあげて去っていったという顛末にも西行という人物の一面が窺える。

ちなみに「伏見」「岡の屋」「日野」はいずれも地名。一首のなかに三ヶ所も地名が登場する点が印象深い。これは当時の流行歌である今様「日暮れなば岡の屋にこそ伏し見なめ、明けて渡らん櫃河や櫃河、櫃河の橋」の「岡の屋」と「伏見」をそのまま取り入れ、「日野」は「日暮れ」をもじったもの。今様では京へと向かう地名の並びを、短歌では逆にして京からどんどん離れてゆくさまを表現しているのだ。

生涯に二千首以上の歌を詠み、数々の伝説を残した西行。その自在な和歌の境地は、歌における心のあそびのみならず、蹴鞠や馬術などの身体のおそびによって培われたものと言ってもいいだろう。『山家集』収載。(小島なお)

